慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十八年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

（通第二九一号）

目次

信仰日記抄……近角常観……(1)
梶谷丈夫さんの人となり……近角真観……(7)
師を求める心(四)……信国淳……(12)
原爆被爆の想い出……児玉彊作……(16)
生きること死ぬこと(一)……花田正夫……(20)

第二十五巻　第八号

信仰日記抄

近角常観

（註）本抄は先生の七十歳、昭和二十七年の日記で、二十八年の春に発病、八月にお亡くなりになりました。先生の最後の信味であります。御忌月に頂きました。　編者。

一月一日。

六角堂（求道会館の御本尊の祭壇）前にて勤行。曇鸞大師の和讃を頂いて往還ニ種廻向のお示しまことに有難かった。

五月十六日。

今晩寝ながら今月はじめ以来の予の生活を考えてみて、胸痛む思いであった。どう思ってみても去ったことはしょうがない、又これが予の生地だとも思わせて貰うのである。これについて思うに、予もいつの間には信心上の天狗になっていたらしい。

お慈悲が喜べたとてそれが我々の自慢の種になってよい筈でもなく、それにつけてもただ有難いのは、如来の大悲一つであるべきはずである。

罪業の我等が思いがけない御あわらみに救われて、一日一日、お慈悲で生かせてもらって行く外に何もあろうはずはない。このように考えては又もとの煩悩人に帰って行く

五月十八日。講話。

旅行中有難かった「小慈小悲もなき身にて、有情利益（うじょうりやく）は思うまじ、如来の願船いまさずば、苦海をいかでかわたるべき」の愚禿悲歎述懐和讃を話す。この和讃の未練気もなく有情利益を思い切ってしまってあるのは珍しいと話した。

なお御慈悲をいただいた一念には、我々の全部が満足させられる事を話したいと思ったけれども、睡眠不足のため続かなかった。割合に参詣者があって有難い。

五月二十二日。某夫人来訪。

最近隣家の主人とかが死亡して、その主人が或者の住所を探していると夢に見た。ところが翌日実際にその家からその人の住所を聞きに来たので、偶然の一致に気味悪くなり、堪えがたいとの話。

これに対して信仰問題を話し、仮りに有意味の不思議であった場合にしても気にする必要のないことがわかるかと念を押し、よくわかったとのことであった故、それならばと更に歎異抄七条の念仏者は無碍の一道なり、…信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし…云云」の御加護の次第を話して別れた。

六月十五日。講話。

歎異抄一条第一句は自分が会得した時の心持にぴったりして忘れられぬ気持などを話す。

「一旦わかっても、又間違い、又間違い、この者を何処々々までもお呆れないお慈悲」が我々にわからせていただく根本原動力であることも話した。

六月十八日。某氏宅。

歎異抄一条を話した。

床に予の書いた「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり」の文と「世の中に尼の心をすてよかし、めうしのつのはさもあらばあれ」の御開山の歌が掛けてあったので、人間どちらに転んでも、罪悪深重をまぬかれぬことを思い、これに関連して、御一代聞書の蓮如上人の「無紋のものを著ることを御嫌い候。殊勝そうに見ゆるとの仰せに候。また墨の黒き衣を著候を御嫌い候墨の黒き衣を著て御所へ参れば仰せられ候。衣紋ただしき殊勝の御僧の御出で候、と仰せられ候うて、いや吾は殊勝にもなし、ただ弥陀の本願殊勝なる由仰せられ候」をも話し、我等の黒衣しか用いない有様も畢意同一味であることを話してきた。

他に「弥陀の本願には老少善悪の人を選ばれず」は我々の善悪の問題は信仰圏外の問題であるということや、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をは遂ぐるなり」は、我々おちつかなかった人間がはじめて「弥陀の誓願……遂ぐるなり」と知らされて、誓願不思議の一つであることに安んぜさせて頂いてきた味いである事等も話す。

七月十二日。講話。

聖人の偉大なところが大体話が出来たようであった。

聖人の常人でましまさぬ有様には近年いよいよ感をふかくする。

七月二十五日。

関東より御帰洛の聖人をおもい起こした。「年々歳々夢の如し。幻の如し。長安洛陽の栖（すみか）もあとをとどむるにものうしとて云々」

聖人はどうしてこのようにどうなりとという態度に出られたのだろうかなど思っているうちに、これは実際問題として各種の厄難にお遇いになったものだろうと考えた。

八月一日。

亡兄は必ずしも立派にせよといって学舎会館をのこしていったものではない。

予等はただ能力の範囲内にて信仰を護っているだけの事である。そのため予等の力の及ばぬ部面にて一つお手伝いを諸君に願い出たならば、諸君は真面目に予の方の事情に従って護ってくれればそれでよいではないか云々。

八月十三日。

自分の講話はあまりは無準備である故、今後せめて一枚づつでもよいから日課として御聖教を拝読させて貰いたいと思い立った。

その考にて一二年前使用のノートが無いかと探したのであるが、大困難の末やっと見つける事が出来て嬉しかった。まず教行信証から読まして貰いたいとおもう。

八月十四日。

念仏以外に物を要したならばそれは大変である。

病院に某夫人を往訪。とにかく嬉んでいて下されたのは意外であった。全く仏力であろう。

予は満足の故に病院を辞する時は足の苦痛を忘れていた

八月十六日。

歎異抄二条が真実信心の内容を明示せられた聖教として真宗にても唯一無二の宝典である。この聖教ましまさずばわれらは信心の核心をすっきり知らせていただくことは不可能である。

なお云えば、世界の宗教一つとして信を語らぬはないけれど、凡百の宗教が、何処で真信の成立をいただくことが出来るか。若し歎異抄がなければ結局は世界の問題としての信の成立を説明出来ないで終るであろう。

第一は「おのおの十余ケ国のさかいを越えて身命をかえりみずしてたずねきたらしめたまうおんこころざし、ひとえに往生極楽の道をとい聞かんがためなり」このほかの事が聞きたくてではない、ひとえに往生極楽の道を問いきかんがためである。ここに御来訪の人々も「ひとえに往生極楽の道をとい聞かん」とて来られたのであろうと、かく云って頂けば納得なさるであろう。

第二は「しかるに念仏より外に往生の道をも存知し、また法文等をもしりたるらんと心にくく思召しておわしましてはんべらんは、大きなるあやまりなり」

いよいよ聖人の有り切りが出る。これは聖人、東国在住中も、自分はかって念仏のほかに説いたおぼえはない、説きもならなかった事ではないか。信心上のもの知りがあって、こうもならなければ面白くない、何かもっと奥にあるであろう等。ここらも我等には何とかしてよくなりたいの思いがあって、南無阿弥陀仏だけでは何の変哲もないという心から云うのである。

第三は「もししからば南都北嶺にもゆゆしき学生達多くおわせられて候なれば、かの人々にも会いたてまつりて往生の要よくよく聞かるべきなり」

第四は「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せを蒙りて信ずるほかに別の子細なきなり」

親鸞聖人が吉水に行かれ、日頃の苦しみを述べたまう。法然上人は選択本願の念仏の正意を説かれると、仰せのままを信じられたのである。

第五は「念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべらん、また地獄に堕つべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」

第六は「たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄に堕ちたりともさらに後悔すべからず候」

第七は「その故は自余の行をはげみても仏になるべかりける身が念仏を申して地獄にも堕ちて候はばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候わめ、いずれの行もおよび難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」

聖人が関東にてもお勧めになったのは念仏一道。法然上人に遭ってはじめて驚かれたのは念仏一道。四十三歳の法然上人が大煩悶の末に善導大師の観経疏を読まれ、「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥、時節の久近を問わず念々に捨てざれば、是を正定の業と名づく、彼の仏願に順ずるが故に」

の文に至って、善導の元意を得られ「彼の仏願に順ずるが故に」の文深く心魂に染み心にとどめられたのである。

私自身も同様である。「あいつのいつまでも我慢のやまぬ、これは困ったものじゃ、可哀想なものじゃ」と兄が言ってくれていることを聞き、私は参ってしまった。頭が下がったのである。今でも種々感ずるところはあるが、しかし頭の下った時の事は何年たっても忘れられぬ。

聖人、従って関東の化導は、ただ大慈大悲の念仏一つ。南無阿弥陀仏。念仏すれば地獄に行かず、天国に生れるために信ずるのではない。

八月三十日。

姉から聞いた「いつまでたっても我慢がやまぬ、こまったものだ、可哀想なものだ云々」という兄の言葉、これはなかなか人に理解して貰えぬ、この様な意外の事とは思わなかった。

聞いていて意外のことに物も云えず、部屋にかえってなお考えた。

この時、我慢の内容がまだつかめていたのではない。何かしらぬけれども、我慢がやまぬとそれを気にかけてくれ

る、その慈悲一つは何はなくとも嬉しかった、頭が下がったのである。

そうしているうちにはじめて、我慢の内容が見えてきた信仰の問題になると誰にも負けぬ信心をとなる、これが我慢。また分からねばいかぬ、分からねばいかぬ。これが我慢、そればかり死ぬまで云う。

× × × × × ×

聖人帰洛後、関東の同朋がおうかがいする。これに聖人はありきりを話された。

南無阿弥陀仏。

私は近頃まことに横着なことなれどもこの歎異抄。……まあ私如き者へこのお慈悲）……

私はお慈悲に御縁づけられなかったならば、今頃どうなっておるやらと思い、それは一つは私が信心の家に生れたお蔭と思っておる。

私は横着に聞いて頂いているが、御縁がなかったならばこの横着なことも聞いていただくことも出来ず、これはひとえに仏祖の御加護によるのである。

そこでいつもながら私の御縁を話す。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」これをどう頂こう。ただ念仏するものをたすけようとの大悲の御約束。念仏するものをたすけようとの願。言葉だけ読むと努力して念仏せよときこえる。

八月三十一日。講話。

法然上人と親鸞聖人との御関係。

「親鸞におきてはただ念仏して……」の味わい。それに予の入信関係など話す。

十月二十六日。講話。

歎異抄二条と選択本願を話し、自分が念仏を知らせてもらった御縁を話した。

よいことは全部仏につき、悪いことは全部自分につく。

十一月一日。

聖人の常の仰せの文と聖人の日常生活を話す。

「ひとえに親鸞一人がためなりけり」

又、歎異抄の蓮如上人の奥書の文「右この聖教は当流大事の聖教となすなり。無宿善の機に左右なくこれを許すべからざるものなり」を一部了解させて貰った。これは如何に御本意を取違うことの恐しいかを示された文。何の故に御慈悲の深いのかは極悪を救わねばならぬ故。

十一月四日。

信仰は自身の経験でなければ話すことは出来ない。

私も話は随分聞いていたけれどもなかなか了解することが出来なかったのである。それが或時、亡姉が亡兄の言なるものを伝えたのでびっくりしてしまったのである。

十二月五日。

歎異抄二条に「身命をかえりみずしてたずねきたらしめたまろおんこころざし、ひとえに往生極楽の道をとい聞かんがためなり、しかるに念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと心にくく思召しておわしましてはんべらんはおおきなるあやまりなり」

私の気づかせて頂いた時の事をきいてもらいます。

実は私も信心の家にうまれながら、如何にしても諒解出来ず、最後に、どうでもよいと自棄状態にまでおちいっていた。その際に思いがけなく兄がこういっておるとの事を姉から耳にした。

「弟を子供の時より育てたけれど、彼に別に不足はなけれども、あいつのいつまでも我慢のやまぬのは困ったもの」と。

最初気がついたのは「あれは困ったもの」と気にかけているそのことであった。

自分自身が我慢がやまぬので困ったなどと思ってもいない。それを気にかけてくれることを不思議と思い、妙なことだと思った。

とにかく親切なことだと思い、以来我慢がやまぬというと忘れられず、この者が立つ瀬がないから見捨てぬということ。以来それ一筋でやっておる。

昭和二十八年（七十一歳）

一月十六日。

某家問題に関連して往年の報恩講記録を開いてみる。

（終り）

○　○

二人の我

柳瀬留治

老ひぬれど老の実感我になく心の青く洟（はな）たれのまま

老といはれ齢数ふに宣へど知的客観にして実感に遠き

鏡に見る八十一の我のつら髪髯白く皺の深しよ

老ひたりと見る他なる我と実感のイメージの我と二人胸に棲む

我は老ぞ老ぞと日々に聞かすれど老と思へずかくて死ぬべし

——短歌草原四月号より

梶谷丈夫さんの人となり

（百ヶ日法要挨拶より）

近角真観

多数の諸先生がお揃いの中で、私ごときが御指命にあずかりましたことは、ひとえに、梶谷先生が、東大法学部学生時代の若い日を父常観の求道学舎に我々と共に、起居されました御因縁に基づくものと存ずる次第でございます。従いまして、甚だ私事に亙りまして恐縮でございますが、専ら求道学舎の一舎生として見た先生の思い出を中心にして語らして頂こうと存じます。

私の隣に居ります木村雄吉、これは関東大震災に新築致しました第二次求道学舎の、第一号入舎生としての誇りを持っている男でございますが、私の妹の主人であり、現在求道学舎を主宰しておる男でございます。

右側に、お一人おきましております木村茂行さんでありますが、これも梶谷先生あるいは木村雄吉と期を同じうして学舎に起居致しました仲間でございます。

私は、支那事変で戦死いたしました兄の文常と共に、当時舎生の末輩として、まだ中学四、五年の青臭い頃から大学卒業に至るまでを先生と御一緒に過しましたわけでございまして、その他に忘れることの出来ない峠延雄さんという方が居られます。この方は兄文常戦死後、憂国の情に駆られて、梶谷先生に遺書を托し、司政官を志願してシンガポールに渡られ、戦局悪化と共に進んで現地召集に応ぜられ、一兵卒としてフィリッピンで戦死された方でございまして、成蹊高校時代の兄文常の同窓でございます。

私の兄貴と、梶谷先生と、この峠さんとは奇しくも同年生れでございまして、今ここに我々六人のうち三人までが亡き人になられましたことを思いまして感無量のものがあるわけでございます。

求道学舎の食堂には、句仏上人の御染筆になる、師徳堂という額が掲げてございます。これは、旧求道学舎の建物を前東本願寺法主であられた句仏上人が…上人はお若い時

代にやはり私の父を師と仰いで下さったのでございましょう…当時親父はまた独身時代でございますが、青年諸君と起居を共にして信仰生活を営む場所が東京、特に父の出ました一高・東大附近に欲しいという熱願を持って居りましたことを察せられまして、森川町にありました憲兵屯所を御手許金で買って親父に与えて下さった御因縁を物語るものと思われます。

その後まもなく父は三年間洋行致すことになりましたので、その留守を清沢満之先生にお預り頂きましたのが、明治時代に精神主義を高唱致しました彼の「浩々洞」の発祥であり、父が帰朝後引き続き同じ建物で主宰致しました寄宿舎が求道学舎の発足であるというような昔物語りであります。

それで、梶谷先生が、この求道学舎で暮された当時のことを若干お話しし度いと存じます。当時、私の親父は、新求道学舎の発足にあたりまして、自分は一生舎監で終るのだと云うことを、常々申しておりました。

その言葉通り、若い時に京都の大谷中学に入りました時に選ばれて舎監になりましてから、大東亜戦争突入の一週間前に亡くなりますまで、一生舎監として暮したわけでございますが、どうしてそういうことをやったのか…今考えてみますと、やはり若い学生諸君と、起居を共にして朝晩の食卓を共にし、朝の歎異抄の輪読、晩の正信偈の読誦…こういう風な生活が何よりも楽しかった、何よりも好きだったと、こういう風に思うわけでございます。

梶谷先生はその中に進んで入られまして、私の記憶する限りにおきまして、晩の勤行は別といたしまして、朝の輪読、それから月二回の座談会…ピーナッツ、塩せんべい、どら焼き等を買って、旧制高校のコンパ方式で月二回信仰座談会を致しました…これに欠席されたことはまずない。晩の勤行と、日曜講話は、ままエスケープされたことはございましたが、エスケープ常習の私とは違って、まことに真面目な学舎生活をせられ、又舎生との交友も熱心に勤められ、何より本業である法律家の基礎知識を熱心に勉強せられました。

父は東大の西洋哲学を出まして、青年時代からの立派な学友に恵まれていたわけであります。それで旧求道学舎と申しますか…大震災前の第一次求道学舎の第一号の入舎生は、二高の校長していられた阿刀田礼蔵先生でございます或は学友である萩野仲三郎先生、これは仏教美術史の権威であられたわけでありますが、これら文科出身の英才方が兎角官僚に頭を押えられて世に出にくい。日本では、折角しっかりした信念をもち、溢れるような抱負をもっていても、法科を出て高文を通らないと出世しないという考えを

身につまされて感じていたらしく、新求道学舎は、進んで東大法学部の俊秀に入舎して頂いたわけであります。梶谷先生は、その俊秀の中の目玉的存在であったわけでありまして、生物学者でありますここに居る木村も、当時から梶谷さんの御部屋を、梶谷法律事務所と呼んでからかって居りましたが、その通り梶谷さんのお部屋を中心にして、よるとさわると五、六人の法科生が集って法律論議を闘わせておったのでありました。

勉強も非常なものであられまして、学年試験を受ける前に、東大の試験用紙を非常に沢山机の上に積み重ねておられるわけであります。何のためにそんなに沢山試験用紙を持っておられるかと私が聞きましたところ…「出来るだけ早く書く練習をしているんで…この紙で、平素から充分にマスターしたものを、限られた時間内に、出来るだけ沢山正確に書く…その練習しているんだ…これが僕の試験勉強なんだ…」と云われましたが、私は流石違ったものだと思った次第でございます。

中でも私は、今特に三つのことを印象深く思い出すわけでございますが、先ず、

第一は、私が東大経済に入りまして、将来何をしようかと迷っておりました時に、偶々当時は、梶谷先生が堀江法律事務所に入られまして熱心に地稽古されて居った頃でございますが、…「真観さん、法律を勉強して裁判官にならんか」と云われたわけでございます。「どうせ求道学舎、求道会館は文常さんが継ぐんだから、あんたは実務家として世に立つべき人である。それについて、学生時代に修得したことの最も素直な延長線上で働いて食って行けるのは司法官と弁護士だ。僕は在野法曹を選んだが…行政官になった友人、一流会社銀行に就職した友人…これらに対して大きな誇りをもっている。彼等は成程一応の出世はするであろうし、金持にもなるだろう。然し僕は学生時代に習得した基礎の上に、しっかり勉強を積み上げて真に社会有用の仕事をするんだ。地味ではあるが、学問と生活を両立させるには司法官が一番いいんだ」とハッパをかけられたのであります。

私も大いに発奮して、二年の夏休みには、舞出先生のゼミナーの論文作成と併せて、法律も大いに勉強致しましたが、生来幾何学的頭脳を持ってないせいか、過度の詰め込みがたたってノイローゼになってしまい、高文はおろか二年の試験は大半振ってしまってやむなく会社に入った次第であります。然し社会に出てから、この法律のガリ勉がいささか役に立った様な感じは持って居ります。これによっても、如何に先生が、法曹、特に在野法曹に対して社会に出られてから亡くなられるまで熱情を燃やし続けられたか

ということを、お察し申し上げた次第でございます。

第二は、私出征中に父を亡くしまして、戦地から帰ってまいりまして、形ばかりの追悼法要を致しました。その時梶谷先生が立ち上って親父の追悼の言葉を述べて下さったわけであります。

その時…たしか大学御在学中に健康を害されまして、休学の上一時療養をされ、そして小康を得て親父を求道学舎に訪ねられた時のお話であったと思います。父は「おお梶谷君よく来た。もうよいのか…」と引ずりこまんばかりにして応接間に招き入れまして、そして余程嬉しかったのでございましょう。たまたま窓の外に陽光が輝いておった日だそうでございますが、そこに無花果の実がなっていたわけであります。私の弟がまだ五つか六つの時でありますが庭で遊んでいた弟を呼びまして「聡信！聡信！梶谷君に、その無花果を喰べさせたい。採って持って来い。君！これは美味しいんだぞ」と、自分でむしゃむしゃ喰べて勧めて下さったと…ここまでお話が進みましたところが、先生は突然顔をおおって号泣された訳であります。そしてそのまま坐って嗚咽して居られました。

私はその時、先生は早くも在舎時代に信仰を得られたんだな、一生に一度の尊い回心をされたのだなと、直感致しましたわけであります。

第三に、満州から私が内地に転属になりました時でございます。戦局日に日に不利でございまして、遂にラバウルは転進というニュースが発表されましたところが、梶谷先生は顔色を変えて求道学舎に私を訪ねて来られまして「真観さん！文常さんも死んだ！常観先生も軍部の専断を憂えながらおかくれになった！峠さんも今南方で死ぬ覚悟で苦労して居られる！その、犠牲の多い、戦争を、今になって尚転進などとゴマ化するは何事ですか！もっとも早くから負けることは判っている筈なんだ！」と憤激され、目から滂沱として涙が溢れ、仁王立になったまま男泣きに泣かれた訳でございます。

私は平素父から「山に入って道を得た者は、解脱したその心をもって、再び山を出て自由に実社会に活躍出来るのである」と教えられて居りましたが、正にその人が仁王立になって、私の前で泣いて居られるのであります。親鸞聖人の書かれた教行信証に、信仰の徹底しない姿を涅槃経を引用して示しておいでになるくだりに「信には二種類あるこの人の信心は、ただ道ありと信じて、すべて得道の人ありと信ぜず、この故に信不具足となす云々」と、こういうことを云われてありますが、私、この時から梶谷先生を兄貴と思い、人生の先達と思い特に全知識と仰いだ次第でございます。得道の人あるを信じたのでありまして、信ぜざ

るを得なかったのでございます。

第二に申し下げた話と共に、梶谷先生が胸中深く抱いて居られた、御熱情を偲んで頂けると共に、若くして早くも浄土真宗の浄信を得られた御人格を察して頂けることと存じます。

今や安養浄土の還相の仏様として御家族御親戚はもとより、我々一同を光被して頂いて居ることを私は信ぜざるを得ません。得道の人はまた彼の土で佛となって、我々を導く人でございます。私は本日遺影を拝しまして、再び生けるが如き御姿に接しました感銘もさることながら、その隣に、三十五才時代の法服を召された先生の御小影がございました。正に今の御長男の玄さんとそっくりであられますその横に二十才時代の白面の法服姿がございました。正に御次男の剛さんそのままであります。我々縁あって先生とお近づきを頂いた者どもが、それぞれの心の中に生きている先生の道を踏みしめ、悲歎の中にも心にぎやかに今後暮らさせて頂くと同じように、私は奥様、御子様方、御親戚御一同が、彼土からの先生の還相回向（げんそうえこう）の御光につつまれまして、確かな足どりで先師の辿られました道を歩みつづけられますことを堅く信じまして、つたない御挨拶を語らして頂きました。どうも有難うございました。

（崎戸製塩株式会社社長・常観先生御次男）

源信僧都詠

夜もすがら仏の道をもとむればわがこころにぞたづねいりぬる

古はおのがさまざまありしかどおなじ山にぞいまはいりぬる

月花のなさけもはてはあらばこそ常なき世にはこころとどむな

同じくは弥陀のちかひをしらせばやともにとのふる人のこころに

大空の雨はわきてもそそがねどうるおふ草木はおのがさまざま

我だにもまづ極楽にうまれなばしるもしらぬもみなむかえてん

師を求めるこころ（四）

信国　淳

＜念仏の歴史への参加＞

院長　念仏が私達の間にあるという意味は、称えている人がいるということ。そしてその称えている人にとって、その人の精神生活と決して無関係に称えられているのでないということです。矢張りその精神生活に問題があって、その問題を解こうとして称えているのに違いなく、又称えられる念仏の方から云っても、それは人間の問題を解決するものとして、人間に関わってきている念仏であるに違いありません。

つまり一口にいえば、人間の精神生活のもっているいろいろな問題性に応えるものとして、現に称えられているのが念仏であります。しかもその念仏は、長い過去の歴史を通して、そうした人間への関わりを持ち続けながら伝承されてきました。私もどうやらその事実に気づくというか、何かそういう事があって、そんなら私もという気持になったんですね。

だから、つまり念仏の意義がわかってというようなことではないのです。本願の心がわかってというようなことではない。現に自分のまわりに起こっている、その人間臭い生活に深い関わりをもったものとしての念仏ですね。その生活の問題が念仏によって解決されるものであるかないかは解らぬけれど、ともかく人間生活に深い関わりをもつものとして、我々の間に伝承されてきているこの念仏、この念仏に自分もまた一つ関わろうと—自分から関わってみようと、こういうことなんですね。ああ念仏というものがあったんだと、ただそのことに気づいた。

その念仏が、私の今日抱えている問題と無関係であるはずがないのだと、ただそのことを思ったということなんです。それで自分の問題が解決するか、解決しないか、そういうことが分ってということではないのです。とにかく現に念仏を称えて生きている人があり、そういう人々の集る場所が、現に本願寺なら本願寺としてあるという、この現

実に初めて眼が開けたということです。

で、その現実に私も参加させて貰おうと、自分の方からそういう気持になったというわけです。それに参加するとどうなるか、そういうことは問題でない。現に称えておる人があり、称えてきた伝承がある。無数の人々が念仏を称えることによって救われてきた。救われなかったかもしらんけれども、とにかく称えてきたという事実はある。そういう事実が現にある以上、それが我々の精神生活と無関係であるはずがないのだと。

だから云ってみるなら、私自身と同じ人間生活をもち、いろいろの悩みを抱えて生きている、その人間の上に現われた歴史的事実、その念仏伝承の歴史的事実、それに初めて私も気がついたということなんでしょうか。それなら自分もその歴史に参加させて貰おうということになった。

問　称えてみましょう、といわれましたけれどもぜんぜん何も考えず只南無阿弥陀仏と称えるという意味ですか。

院長　その通りです。君のいう通りただ称えるという意味です。しかし注意せねばならぬことは、そういう意味で只称えるということは、聖人が歎異抄の第二章に云っておられる「親鸞におきてはただ念仏して…」と云っていられるその念仏とはぜんぜん違う。今云うた只称えるは、我々の日常的な意識上で、只称えてみましょうとこう思って、思ったままを始めるということです。そこにはおのずから努力が必要になり、思ったことを思った通りやらねばならぬということになる。従って只称えるということが〃ただ称える〃ことにならない、どうしても努力が必要になります。意識をいつも称えることに集中しなければならない。

称えてみましょうという—自分も念仏の歴史に参加しましょうというその心に偽りはないのですが、併しそれは悲しいことに我々の日常的意識において起っているのです。

ですから称えましょうと思い、そして思いのままにそれを実行しようとすることは、必ずそこにそれを妨げるものに出合わねばなりません、だから戦わねばならない。念仏を称えましょうと思えば、称える以外のあらゆることを邪魔もの扱いせねばならぬし、邪魔もの扱いされたものはそのため却っていよいよ邪魔だてする—邪魔だてするように思えてならぬという、そんな微妙な関係がそこに生れる。

だが又そこから、普通に念仏三昧と云わることが始まるんですね。つまり明けても暮れても念仏する。念仏のためには、生活のすべてを犠牲にせねばならんということになる。山に住むか、何処かに隠れて、明けても暮れても念仏を称える。所謂、百万遍の念仏です。法然上人の門下にはそういう人が数多く出たんでしょう。それは、日常意識の上で念仏を称えるからであって、その場合称えることに努

力せねばならない。努力的であるということは、念仏をとることによって、念仏する以外の自分の生活の全てを同時に捨て、それを犠牲にせねばならぬ。つまり念仏が、人間の自力をもってする自己克服の道になるのです。

〈一　如の味わい〉

私が云うのは、私の従妹になる小さな女の子とただ一緒になって遊ぶということで、遊ぶことに何かこちらに特別の理由はありません。ただ自然の感情として、その子を可愛いと思う、その心のままにその子に愛情をかける。子供ですからこちらのかける愛情に素直に応じてくれます、そこには殆んど何のわだかまりもない。その子と私の間を隔てるような、わだかまりが殆んどないような交わり、こちらから「オーイ」と呼べば、向うからも「オーイ」と応える。そんな関係がおのずから成り立つ、云ってみるなら、そんな風な愛情の交換だな。それを単純という言葉で私は云っておるわけです。

自然というものにしてもそうでしょう。自然の草木とか花とかに向けるこちらの愛が、純粋であればあるほど、純粋にこちらの愛に応え、こちらのうちに溶け込んできて、こちらに一つになってくるもんなんでしょう。

大人同士の間だとそういうわけにはいかんのだわ。いつもわだかまりがあったり、愛すると云っても、そこにはいつも間を隔てるものがあるわけです。本当に自分が相手に溶け込むというような、そういうような意味での単純な愛は、大人の間には生まれ難い。私が何かを愛するという場合に私の自然に選んでいたのが、そういう幼い子供とか、無心の花とかいうものだったわけで、そういうものによって私の中に単純な愛とでもいうべきものが初めて生れてきたと云えるのではないかと思う。そしてそれは私にとって確かに尊い経験だったといえる。そこには何か自分自身の生活からの解放感というようなものがあった。

私はよくその従妹の手を引いて、鉄道線路の上に出て、枕木の上を歩いたりした、あの枕木の上を並んでね、一つ一つ数えては踏みながら。子供にはああいうことが面白く楽しいんだな。一つづつ数えながら歩むんだからね。同じように足を揃えてさ、四本の足を揃えて順番に渡って行く或時には枕木の間にタンポポが咲いていて、それを摘んで一緒に遊んだこともある。まあそういう意味での、全く意味のない平凡な幸福感だったと思います。

そういう幸福感、単純な愛を通して身に覚える幸福感は実は私共にとって大変大切なものではないのかな、我々の心を養うということから云って、浄土を安養というけれど私は何かそういう単純な幸福感には我々の心を安らかに養うということがあるのでないか、つまり安養性というべき

ものがあるのでないかということを思う。夫婦の愛情、愛人同士の愛情といったものにしても、そういう単純さに徹するということだけが、その愛自身を実感することになるものと思う。

互いに深刻なことをいって愛情の議論なんかしてみたって、それは愛情でも何でもなかろう。愛するというのは、相手の中に自分が溶け込み、相手が自分の中に溶け込んで一つになるということ以外ではない筈だ、仏教ではそうして一つになることを一如（いちにょ）という言葉で云い現わす。が、その一如の境が現前して、自分の体験になるということはまことに容易ならぬことなんですよ。人間は皆身体が別でしょう、心が別でしょう、そして違ったもの同士が、それなら何処で一つになれるかという問題が、私共には必ずみなあるんだ。

そういう問題に答える場所が、つまり違ったもの同志の出会える場所が、つまりこの一如というところにあるのだと思う。しかし、私が私の幼いものの上にかけ、あるいは自然の上にかけた愛情からわずかに経験した一如の味わいが、私にとってどんなに貴重であったにしても、それは流れる時とともに、はかなく消え去らなければならぬものであったことは、むろん云うまでもないことです。（未完）

病室の白壁

聚墨生

物音一つしない夜更けの病室で
ベットに横たわって
白壁に耳をかたむけると
いろいろの声がきこえる

ひっきりなしに続く痛みに堪えるうめき
ながびく病にまたしても出るためいき
思うようにならぬといかりののしる声とつぶやき
金はいくらでも出すからと無理なことを医師に訴える声
あらゆる感覚を奪われた病人の吐く息ばかりの幽かな音
あたたかみを残しながら息絶えた人を取りまいて、
呼びつづけ、叫びわめき、むせび泣く騒音

じっと眼を閉じると、またもとの静けさにかえり
一切を録音したまんま病室の白壁は沈黙をまもる

（かつて病院ですごした時）

★　★　★　★　★

原爆被爆の思い出

広島市　児玉彊作

その日私は宿直で、病院（当時広島陸軍共済病院、今の県病院）のなかにいた。それも十分位前から病院のなかの理髪室にいた。理髪室ではすでにN先生が刈って貰っていた。私は椅子に腰かけて先生がすむのを待っていた。

しばらくして、ピカッと光ったかと思うと大きな音とともに、閃光が花火のように降りそそいだ。病院に焼夷弾が落された！そのとき、私はそう思った。それが原子爆弾であるとは知るよしもなかったのである。

理髪室は病棟のかげに手術室と炊事場にはさまれていた平家建で浴室とならんだ小さな部屋で、北は倉庫になっていた。そのため診療棟や病棟はひどくいたんだけれども、理髪室は天井が落ちてきたぐらいであった。私も落ちてきた天井板で頭を打ったが、傷は大したことはなかった。

暫くしてもう何も落ちてこないのを確めて私は外に出た建物は傾き、瓦は落ち、ガラスはこわれているが病院の建物が焼けているようすはなかった。職員を始め人々が何か大声で叫んでいたが、その内容はよくわからなかった。

私はとりあえず、私の医局へ急いだ。天井は一部落ち、窓はこわれガラスがあたり一面に飛び散っていた。私の机の上にもガラスが散らばっていた。（O君はガラスの破片で頭を怪我され出血がひどかったということであった）

廊下に出て外を見た。北の方、市の中心部の方は黒煙が立ちこめていた。街は燃えているようであった。街がどのようになっているか全くわからない。

暫くして負傷者が次々と飛びこんできた。宇品地区の人が多かったので殆んどの人が火傷と外傷であった。やけどと傷の手当を続けた、相当貯めてあったチンク油やマーキュロなどが補ってみるまになくなっていった。

しばらくして職員の一人が私をよびとめた、

〃医員殿、血便の患者がいます、診て下さい！〃

私は庭の片隅にやすんでいた患者を診た、年齢もそう多くはない、勿論直腸癌でもなさそう、痔でもなさそうだ。

夏のことであるし赤痢かも知れない、私はその時はそう思った。その日同じように血便の患者を他にも二人ばかりみた。原爆症であるとは知るすべもなかったのである。

建物はひどくいたんでいたけれど、宇品地区には病院があまりないので、負傷者が次々とやつてきた。手当を受けると多くの人は帰っていったようであるが、それでも帰れないで病院の待合室などにふせってしまう人も少なくなかった。原爆症だとは考えも及ばなかったので、内科的治療などはあまりしていなかった。

市内はかなり広範にやられているらしいという情報であった。私は家のことを思いだした。また家でも私のことを心配しているかもしれない。日がかげりはじめた頃私は院長の許しを得て家路についた。

私はふと兄のことを思い出した。鉄道病院のほうを通ってみようと、私は比治山線の電車道を駅の方に向かって歩いた。皆実町のへんは家は傾きながらも残っていたが、比治山の麓のあたりから家はみな焼けていた。広島駅も焔をあげて燃えていた。

病院は焼けおちていて、兄の様子などは全然わからなかった（兄は病院で建物の下敷きになり、病院が焼ける前に漸く救出された。二十米位のガラス片が腹腔の中につきささり一週間後に私達の病院長によって剔出して貰った）

兄の消息が不明のまま私は二葉の里へ出た。街は焦土と化して熱くて通れなかった。私は鉄道線路へ上った。陽はもうとっぷり暮れていた。横川の材木土場の材木がさかんに燃えていて夜空を焦かしていたのが印象的であった。

私は楠木町の川岸を北上した。崇徳中学をすぎたあたりから焼けずに残っている家が目に入った。これなら自分の家も大丈夫かもしれない。とはいうものの私の家のある長束でも焼けている家（それは藁屋であったが）をみた。漸く家に辿りついて無事な家族をみてはじめて私は胸をなでおろした。勿論家はひどくいたんでいて窓枠はこわれガラスも砕けて飛散していた。

× × ×

その夜食事を終えて私はY眼科部長を山本に訪ねた。部長は十日市町で電車の中で被爆されたが、右の頬と右手に火傷があるだけであった。

〃けがも大したことはないようだから四、五日休ませて貰ったら病院に出勤します〃

と部長は云った。至近距離で被爆して体が著しく傷めつけられているとは部長も私もその時知る由もなかった。

〃体が悪いようでしたら何時でも云って下さい〃

そう云って私は部長の家を辞した。

翌朝早く部長の家から使いの者がきた。部長が身体がだ

るいから何か注射をして欲しいとの伝言であた。

× × ×

その日は私は中心地を歩いて病院に向かった。学徒動員で隣家の少女が郵便局に勤めている消息が分らないので、私もそのあたりを通ってみようと思ったのである。

横川、寺町、相生橋から、本局のそばを通って大手町筋を下った。行くところ焼野原が続いていた。中心地では橋の上あるいは路上に死体が沢山倒れていた。焼けきれないで内臓の露出している馬もみた。私にはどうする術もなくただ合掌して通りすぎるよりほかなかった。

その夜も日が暮れて家に帰った。私が医師であると知って近所の人が五六人診て欲しいと云って来ていた。その内一人の少女は女子挺身隊員として中町の電話局で勤務中被爆した。体にガラスによる傷が三十数ケ所もあった、私はその破片を一つ一つ去ってマーキュロを塗った。腹痛を訴えていたので検診すると、痛みは廻盲部にあったが虫垂炎のようには思えなかった。〃痛みは盲腸の場所ですが、虫垂炎とはまだ断定できません、今夜一晩ようすをみて下さい〃と云って私は彼女を帰した。

ところが翌朝未明、彼女は死んだ。家族の話ではその時血の便のようなものが出たということであた。

× × × ×

私はその夜遅く部長の家を訪ねた。そしてリンゲルや、糖、B、Cなどを注射した。

〃体の具合が悪いようでしたら何時でも遠慮なく云って下さい〃と云って夜半に私は家に帰った。

翌日は私は宿直で病院に泊った。その翌朝早く使いの者が部長の死を報らせてきた。

院長の命令で私は眼科の看護婦二人を連れて部長の家を吊問した。私達の問いに夫人は

〃夜中に一人で便所に行きました。暫くしてウンとうなるような声がしましたので急いで行ってみると主人は便所から出ようとしたまま倒れていました。脈をみましたが、もう触れませんでした〃

と話された。私は看護婦に

〃肛門の方を気をつけてみて下さい、下血されたような気がするから…〃と云うと

〃医員殿、おっしゃるように出血されたようです〃

と。病院に帰って私は院長にそのことを報告した。

病院には今一人外科のF君が入院した。彼は福屋の前で電車を待っていて被爆した。外からみた傷は軽かった。彼は軽く考えて被爆直後は親戚の救護にあたっていた。二三日後に体に異状を訴えて入院してきたのであった。

〃発熱しているが外科的には原因がつかめない。結核か

何か内科の病があるのではないか、診てくれ給え〃
と院長から云われて私はF君を見舞った。結核が聴診器で分かろう筈はなかったが、ともかく聴診上わからない。
〃院長さん聴診器では何もつかめませんが、Y部長と云い近所の少女といい出血しています。病院でも何人かの血便をみました。この度は何か体が傷めつけられているのでないでしょうか。F君をはじめ病院にいる人達を精密検査をしてみたらどうでしょう〃
と私は院長にいった。
〃それはよかろう、そうしてくれたまえ〃
私は病理にまず血液検査から始めて貰うよう依頼した。
F君は白血球数一八〇〇であった。そのほかにも白血球数が減少している人が非常に多かった。次々と死んでいった。F君も数日後死んだ。

× × × ×

電気がつかないので、ラジオも聞けない。勿論新聞もなかった。従って私達は外部からの情報は何一つ得ることが出来なかった。白血球が少ない、体が傷めつけられている特殊爆弾らしい、そのように気づいたのは卒直にいって以上のように数日たってからであった。
下血だけでなく喀血もみた。溢血班が出た患者も多かった。次々と患者が死んで行った。警防団の人達が死体を集めては焼いた。昨日も今日もと火葬が続けられた。私が住んでいた長束でも近所の人が次々と死んでいった。焼場が間にあわないため、山を堀って棺を入れて焼いた。多い日は一日に七カ所ばかり堀って焼いたこともあった。ときどき悪い夢をみているように、想い起こすことがある。
薬局長の夫人は白血球数が病理の報告では二〇〇にまで減った。輸血や補液で九死に一生を得た。

× × × ×

敗戦による軍の解散とともに病院は廃止されることになった。十月一日から日本医療団に一応所属することになったけれども、病院の修理は一向になされなかった。建物は傾き瓦はほとんどこわれて吹き飛んだままであった。
このため雨でも降るといたるところ雨が落ちてきて（それは雨もりという状態ではなかった）まともな部屋は一つとてない状態であった。残っている患者を雨を避けて片隅によせるほかなかった。被爆前もできるだけ退院させる方針をとったが、被爆後はなおさら退院できる患者はできるだけ退院させるようにせねばならなかった。
このためまともな治療はできなくなってしまった。ましてや検査を行ない、データを揃えることも途中で断念せねばならなかった。また九月末、軍から書類はできるだけ焼却するようにとの命があった。従って原爆について何一つ

研究成果を報告することが出来ない。ここでも学問的なことを何一つ書けないことを申訳なく思っている。

× × × ×

被爆の一月前、私は呉にいて空襲にあった。あの夜に呉は街の大半を焼いた。焼夷弾であったけれど、落されたらとてもバケツなどで消せるようなものではなかった。
〃焼けるのを防ぐことはほとんどできないようです。それより入院患者を無事に運び出すことが大切だと思いますもちろん退院できるものは退院させましょう〃
と私は院長に進言した。
院長は私の進言をいれてくれ、職員全体が五班に分けられた。私は四班に入れられたけれども、四班の医師はN先生と私、ともに内科。そこで矢張り内科系外科系一人づつに組みかえようということになり、私はY産婦人科部長とくんで一班に入れられた。一班には予備役とは云え将校が多かった。窮屈な感じがしたので私は庶務係に他の班にかえて欲しいと頼んだ。
〃医員殿、もうこのままにさせて下さい。遠慮でしたら隣の私達の部屋で寝ませんか〃とN事務次長が云った。
〃そうだね、じゃそうすることにしよう、無理なことは云わないで〃
私は素直に彼の言葉に従った。
最初の宿直であった。私はふだん可部線ではY眼科部長と一緒の電車か、その後の電車で通っていた。もし宿直でなくて、Y部長と同じ電車だったら、私も十日市、一つあとの電車だったとしても寺町のへん、いずれにしても私の体はまともではなかったであろう。悪運が強いというか、私は原爆にあいながらほとんど傷害を受けることなく生き延びることができた。
人間は無理をせず与えられた境遇にあるがままに生きるべきである。徐らに人間の知恵であれこれとはからってはいけない。これが九死に一生を得たあのときの私の心境であった。その後も私はしばしばこの言葉を口の中で反芻するのである。
それにしても、私は被爆後も（最近は少なくなったが）しばしばX線の前に立つ。私もひょっとすると白血病か癌などで死ななければならないかもしれない。ふとそんなことを思うことがある。いずれにせよ死ぬ時は苦しむことであろう。肉体的には苦しんでも、少しでもその苦しみに耐えられるだけの心の安らかさを持ちたいものである。私はまたこんなことを思う
けれどもいい年をして私には今日でも進歩が少しもみられないようである。最後の脈をとって往診先から帰りながら〃お前は大丈夫か〃私はしばしば自分に問いかえすので

ある。〃お前の命はあと数十分だ〃といわれた時、私の心は素直に心安らかに受けとめられるであろうかと。

山の頂きは遠きにあってなかなか登れない。還暦も近い。のだから、低い小さな山であっても、その頂きにもうぼつぼつ辿りついてもよさそうなものなのに、私はまだまだふもとをさ迷っているにすぎないようである。

あれから二十数年、被爆から今日までを振り返りながら私は今日もこんなことを思う。

広島医師会。　昭和四十五年四月発行「原爆日記」

生きること・死ぬこと（一）

花田正夫

一、生のよるべ

私は岡山県の田舎に生まれましたが、草も木も大地に支えられておりますように、生きるうえにしっかりしたよるべがほしかった。それを暗中模索し、闇くもに求めました。先ず本能的欲望のままに、名誉、財産、愛情、等々と、それを求めて生きがいを見出そうとしましたが、この道は欲望が無限で、力に限りのある身には満たされるということなしに、不平と不満と不安と焦りのくり返しでありました。かというてその欲望を捨てることも出来ぬままに、それはそのままにして、理想的願望に目を向けはじめた。

新しい道を歩むについて、まず三千年の人間の歴史において、時の流れに障えられないで人の心の燈火となっている聖人、賢者の教えを学び、その道を辿ろうと思い立ちました。さて私の生家は真言宗の在家でしたが、仏教を聞く機会もなく、難しいのでとても手がつきませんでした。中学で儒教をすこし教えられ「朝に道を聞けば夕べに死すとも可なり」という言葉に若い私は非常に感激しました。朝に道が聞けたら夕べに死んでもよいというような道が本当

にあるのだろうかと、こころひかれるままに、読んだり聞かして貰ったりしているうちに、聖人は独りで謹しみ、志士仁人は身を殺して仁をなすとありますが、閑居するとろくでもないことしか考えないし、人を殺してでも自分が生きたい、という小人、俗物にすぎないことが知れ、その道は私の手のとどかない高嶺の月でありました。

ついで『聖書』を読みはじめ「天地は失せなん、されどわがことばは永遠に空しからし」という教に非常に心をひかれました。しかしその神は天地創造の神であり、絶対愛の神であると聞きますけれども「子を持って知る親の恩」というように、親になって親がわかりはじめる、自分に愛があれば、神の愛をひたひたと感ずることが出来ましょうが、私には隣人を愛せよ、敵を愛せよと教えられても、利己心に障えられ、好悪の情に曇らされて、それがなかなかむつかしい。それどころか田舎者の母さえも都合のよい時はよろこび、でないと邪魔にする、火鉢あつかいしか出来ないことが知れました。自らの罪によって深海に沈む人魚はどうしても罪の潮から出られないのであります。

そこで当時懺悔の生活で有名だった、京都の一灯園に清水精一先生の御紹介で入って、無一物中無尽蔵、有花有月有楼台の空無我の境に入れば、すべてが甦ってくる、生きかえつてくると教えられ、托鉢行、下座行によってそれを得ようと願いました。さて形だけの下座はやれても、内心では自分は善いことをしているぞと、こころの頭があがってきます。実がのった稲の穂は頭を下げますが、白穂の稲は何時までたっても頭が下がりません。当時思いました、落ちてくる林檎に驚いたニュートンに引力の発見があり、ありふれたこと、つまらぬことと見ていた人々には発見はないように、下座の心こそ人類の光をもたらす窓であると。しかし私自身が底抜けの愚者で、頭を下げるこつも出来ない、あべこべに頭を上げることしか出来ない身とて、その道も亦捕え得ない水中の月となってしまいました。

生のよるべを求めだしたのは、私が六高の理科乙類に入った頃で、ドイツ語の池山栄吉先生が私共の担任でした。変った人だ、不思議な徳をもった人だとみんなが尊敬していましたが、先生が深い仏法の体験者ということは知りませんでした。私は先生に毎日ドイツ語を学びながら『聖書』を読み、或は一灯園に入り、あちらこちらとさ迷うておりました。

行き詰った私が、伯父から『歎異抄』をすすめられ「池山先生はこの深い体読者だよ」といわれて、初めて先生に教えをうけるようになりました。私自身よき人を身近に持ちながら、真実を見抜く眼のない悲しさを知り「道は近きにあり、人これを遠くに求める」という一句も身にしみて

知らされました。

さて、伯父に押され、先生に導かれながら『歎異抄』を読んでおりますうちに「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」の教えに驚きました。是非善悪の相対差別の枠内から出られないで、善人はみんなから手をさしのべられるが、悪人は捨てられ、智者は重宝がられるが、愚者は省みられない。こうした世に冷たい差別の厳しい風が吹く中に、絶対にして平等なまこと、へだてないこころにふれたとき、自分のような石、瓦のような、雑草の身も、この本願のまこと一つは、おへだてなしに帰らせて下さる、私の久遠の親はここに待っていられたのだ、と感動しました。

ここに私の行く道は決った。親鸞聖人に導かれて、その道をたどろうと、自然に心が決まりました。しかし、道が見つかったのと、その道に生かされるのとはちがいます。たとえば東京に行くのに汽車に乗れば行けるとわかったのと、その汽車に乗ったことは非常にちがいます。この道より外にない。尊い道である、ありがたいとは思いますが、生活は即さない、日常の生活に力とならないのであります。ここでまた数年の歳月が空しくすぎてゆきました。

丁度その当時、第一次大戦後のあおりで家が没落し、しかも岡山医大に入りました年に父は死にまして、学資にこまり、M家から出して貰い、その家から大学に通っておりました。初めの間は、私も感謝すれば、向こう様も非常に暖かくもてなして下さるので愉快にすごしましたが、遠くでみれば綺麗でも、近づけば欠点が見え、それが段々に重なるにつれて、こんな人か、あんな奴かと、へだて心が起こってきました。こうして年と共に恩人に対して嫌な思いが起り、互に心の壁が出来て、心の通わない、暗い冷い世界に閉じこもってしまいました。

そうした時、あまりの心の暗さにたえられないで、正信偈の「煩悩に眼さえられて摂取の光明見たてまつらずといえども、大悲ものうきことなくて常に我身を照らすなり」を抜き書きして、自分は煩悩に覆われて闇い生活しているが、弥陀の大悲は常に照らして下さるとの仰せを繰り返しくりかえし誦してはすこし心のやすらぎを得ましたが、それもすぐ崩れ、今度は有縁の山寺に一週間籠って念仏を称えました。数日続けると丁度山の上から街を見おろすと、マッチ箱から出入りする蟻のような人生生活で、そういきりまくることもないじゃないか、というような心にもなり、或は悶々の情を持ったまんま荒磯に立ってひっきりなしに寄せてはかえす波浪を見ていると、広い別世界がひらけるように、称名しているうちに心のゆとりも出来ますが、さてもとの生活に帰るとそれも三日も保てないやすらぎでありました。

そうした間にも、友に愚痴をこぼし、兄に苦衷を訴え、母にも打ちあけましたが、結局は皆の者を困らせ、苦しめるだけでした。それかといって自分の心はすさむばかりでありまして、心で恩人を邪魔にしているおそろしい鬼の心になりました。

そのとき私の胸に浮かびましたのは、六高から甲南高校に転任せられた時の池山先生のお言葉でした。

「歎異抄の十三条に〃さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべし〃と親鸞聖人が仰言っているが、この池山も内に八万四千の煩悩を持つ身で、罪に対する免疫性を持たぬ身とて、君達と別れてどういう業さらしをするかもしれたものではない。あんな奴だったかと世間から捨てられるかもしれないが、そのような業の深い私を、ここまで見抜いて下さる聖人ばかりは、どうあろうとも、お前もそうかわたくしも同じだよと、御一緒して下さる方だね」

こういうことを教えて下さったのでありますが、それをふと思い出して、この恩人さえも仇と見る鬼の私を聖人ばかりはお祭し下さって、世界中の人から捨てられても、お見捨てのない弥陀仏の大悲のまことを御身にかけて知らされ〃ありがたいな！〃と人生に生れたよろこびを覚え、急いで父の墓前にお禮まいりをせずに居られませんでした。

徒然草

（九十二段）

…道を学する人、夕には朝あらんことを思い、朝には夕あらんことをおもいて、かさねてねんごろに修せんことを期す。……なんぞただ今の一念において、ただちにする事のはなはだかたき。

（九十七段）

その物につきて、その物を費しそこなう物、かずを知らずあり。身に虱（しらみ）あり、家に鼠あり、国に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

（九十一段）

……吉日に悪をなすに必ず凶なり。悪日に善をおこなうに必ず吉なりといえり。吉凶は人によりて、日によらず。

（八十五段）

……狂人のまねとて大路をはしらば、則ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば、悪人なり。……舜を学ぶは舜の徒なり、偽りとて賢をまなばんを賢というべし。

（百七十一段）

よろずのこと、外にむきて求むべからず、ただこころをただしくすべし……。

あとがき

三伏の夏と昔から言われた通りのきびしいこの頃であります。暑中御見舞申上げます。

八月は近角常音先生の御忌月とて、先生の最終年の信仰日記抄をかかげ、御信徳に浴させて頂きました。

またやりそこない　またやりそこない

それだからお見捨てないお慈悲でないかと書いて頂きました短冊と、唯仏一道独情閑、と念仏者は無碍の一道なりとおのこし下さいました御筆跡は私の信の旅を照らし護り導き続けて下さいます。

この月、真観様から求道学舎御出身の信の人、梶谷弁護士の百ケ日法要の際の感話を頂きました、人と生れてよき師にめぐり会えることは何と幸福なことでしょうか。

更に八月は被爆日本の忘れられぬ月とて、広島の医師会副会長の児玉さんの原爆日記を転載させて頂き、その惨状を読んで頂き、私共の人生のかえがたいいましめとさせていただきました。

釈尊の幼い時、小虫が小鳥に食われるのを見られて、どうして相手を殺さずには生きていけないのだろうか？と非常に悲しまれたと伝えられるが、この問題は今日もなおそのままに繰り返されて、力をもって相手を征服しようと人智の限りをつくしております。

荘子は、鋌と鋒のたとえを引いて、鋭い鋒に対し、堅牢な鋌更にそれ以上の鋒と、国と国が力の競走に奔命して、空しい生涯を送ることを警告しておりますことも思い出されます。

弱い者は強い者に支配せられ、やがて「力は正義なり」という暴言が出ますが、一寸の虫にも五分の魂がある世に単なる力はそれが続く間のことでやがて興亡盛衰が繰り返されることは火を見るより明らかであります。

こうした世に「真実を顕わす」という一事に九十年の生涯をかけられた親鸞聖人の掲げられる実語、金言をとおして不滅の真実の大道に導かれて、風波を越えてまいりましょう。しかもその道は「親鸞私なし」の道で、釈迦仏はじめ三国七高僧の真意にかない、人々の心に永遠の灯火として老少善悪のへだてなく恵まれる道であります。

人それぞれに身勝手なことに終始して、われよしとなっておりますが、一枚の着物の粗衣か美衣かによって人間の価値を上下するような浅智慧しか持たぬことを省み、よき人のおしえをまず身にうけてまいりましょう。

跡戻りあと戻りして辿るらん甲斐なきことに心迷いてとは近角常観先生の御晩年に愛唱された一首でありました。

＜御　案　内＞

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半。南区駈上町二ノ八八。一道会例会。市電、新郊通り一丁目下車、東入ル、三筋目、左入ル二軒目。

○毎月二十四、午前、午后昭和区小桜町、教西寺、法話会。市電、御器所通り下車。市バス、北山下車

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）

編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番

印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎

発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七